

聖書:創世記28章10~19節

小学生の頃、冬休みの宿題のなかに今年一年の目標を立てるというものがありました。背伸びしながらそれらしいことを書くのですが、目標を達成できたためしがない。そんなことを毎年繰り返すと、自分はダメ人間だとすり込まれていく。今振り返ればどこに問題があったのかわかります。宿題で書かされるのは、自分ががんばって達成する目標です。だから無理があった。しかし聖書が語るのは、ひとりでがんばるのではなく、主とともに歩んでくださるということです。そのことをヤコブの人生から学んでいきます。

ヤコブは父をだまして長子の権利を奪ってしまいます。そのことを後で知らされた兄エサウが黙っているわけはありません。弟のいのちを奪うのだと息巻いていく。こうなっては家にいられません。ヤコブは、母の親戚であるラバンのところへ逃げていきます。そうやって旅を続けていたある日、石を枕にして横になり、天の星を仰ぎながら考えた。無事に親戚のところにたどり着けるか。こんな不祥事を起こした自分を迎えてくれるだろうか。もう一度自分の家に戻ってこられるだろうか。そんな心配と不安がぐるぐると頭の中で思い巡らしているうちに眠りにつくと、彼は不思議な夢を見ます。

12節。「見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。」そのはしごの上に立たれた主は、さまざまな約束を語ります。あなた

はこれからどうなるのかと不安だろうけれど、安心しなさい。あなたは必ずこの場所に戻ることができる。あなたが横になっているこの地をあなたとあなたの子孫に与える。この地を相続した子孫は四方に増え拡がり、世界の祝福の基となる。そんな約束でした。

ヤコブは夢から覚めると、これは単なる夢ではない、主ご自身が自分に語ってくださったと確信し、枕にしていた石を立てて油を注いで祭壇とし、主を礼拝します。

ここで疑問がでてくる。ヤコブは兄エサウになりすまして長子の権利をだまし取りました。このことが兄にばれると、家を飛び出して親戚の家に転がり込み、ほとぼりがさめるまで隠れていよう。こんな人がみなさんのそばにいたらどうですか。暖かい心で迎えられるか。とんでもない。ヤコブはまず、自分がしてきた罪を告白するべきだ。もしそれができたら、喜んで迎える。そんなふうに思うのではないか。

ところが、ヤコブがこの夢を見る前に罪を悔い改めたということは、聖書に書かれていません。悔い改めをしていないのに、神はヤコブの罪を赦し、大きな祝福の約束を語るのです。悪いことをしても罰せられず、どんどん祝福される。いっぽう兄のエサウは、確かに長子の権利を軽く見るという弱さがありました。だからといって、だましたイサクが得をして、だまされたエサウが泣き寝入りというのは、なんとも理解できない。どこに神の正義があるのでしょう。

ここだけ切り取ってみれば、確かに神の正義はどこにもないように見えます。しかし、ヤコブの人生をもっと大きな視点で見ていくならどうでしょうか。親戚ラバーンの家で働くことになったヤコブがどんな経験していったかです。彼はそこで大変な苦労を味わうことになる。大きく二つあります。一つ目は結婚のこと。ラバーンにはレアとラケルという二人の娘がいて、ヤコブはそのうちの妹ラケルと結婚したかった。ラバーンは七年間一生懸命働いたらラケル結婚してよいと約束する。ところが七年経つとラバーンは約束を翻し、姉のレアと無理矢理結婚させ、ラケルと結婚したければもう七年間働けと言われる。これはだまし討ちです。二つ目の苦労は羊のことです。羊を飼っているとどうしても事故が起きるわけですが、ラバーンはなんでもかんでもヤコブの責任にして、自分だけが得をするようなシステムをつくってしまう。ヤコブだって文句は言いたかった。でも自分から頼み込んで婿入りさせてもらった身分ですので何も言えません。そこで考える。なぜ我慢できたのでしょうか。ヤコブが忍耐強い人だったからか。そんなことはない。もともと彼は忍耐などしたくない人です。答えは15節にあります。「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

神は私たちの人生のまるごとに関わっておられるのです。たとえ今悪いことをし、悔い改めもせず、神を知ろうとしなくとも、神の方から一方的にご自分の現して下さり語りかけてくださる。「わたしはあなたと

ともにいて、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。」この約束を聞いてからヤコブは変わっていきます。かつてヤコブは神など知らず、自分が世界の中心にいるのだと思っていた。しかし、神に出会ったとき、神がこの世界の中心におられることと、そんな神がこの私と歩んで下さる。そのことを教えていただく。ただ知識として知ったのではありません。ラバーンの下で苦労しながらヤコブは神のことばが真実であることを身をもって体験していきます。たしかに忍耐は必要でした。でも、そうするうちに自分がしてきた罪を振り返るようになり、故郷に戻って兄のエサウに謝る決心をしていく。かつてのヤコブには考えられない変わりようです。

ヤコブと歩まれた主は、私たちとも歩んでくださるはずです。そんな歩みの先になにが待っているでしょうか。神がともにおられるから、悪いことは何も起きない、ということではありません。神がともにおられるからこそ、むしろ試練にあうことがある。ヤコブがそうであったのように、私たちも試練を通して造り変えられていきます。「試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。」（ペテロの手紙第一1章7節）

イエス・キリストも十字架で苦しみに遭われたことを思い出しましよう。もし私たちが苦しみに出会うことがあるなら、主がともに歩んでくださるということは、主も一緒に苦しんでくださるということではないでしょうか。そうやって主の愛と恵みを覚えていく。かつて私たちもヤコブのよ

うに救われる資格のない者でした。けれども神は私たちを救い、造り変え、約束を成し遂げてくださると語り続けます。この神とともに、この新しい一年をともに歩んでまいりたいと願います。